

D69

庭
の
訓

曹洞大學長 秋野孝道述

曹洞婦人會



定期布教會場

本郷區駒込吉祥寺町

毎月七日

吉祥寺

淺草區榮久町

十五日

永見寺

本郷區本郷六丁目

十七日

喜福寺

曹洞婦人會主意書

我が曹洞宗の東京に於ける檀信徒は優に明治を以て數ふべきに未だ曹洞婦人會の組織せらるるは極みと謂ふべし惟ふに將來の國民を陶冶し導かんとするには先づ家庭の中

特49
194

心たる婦人自ら其責に當らざるべからずわれら茲に考ふる所ありて不敏を顧みず本會を組織して上は佛恩祖德に報ひ下は同胞と共に生死透脱の大事を會得し行持報恩の淨行を勵まんとす冀くば志を同ふする諸姉奮ひて加入せられん事を

明治21年
44無
内交

- 東京府第三宗務所管内諸寺
- 第一組 高林寺 玉林寺 大林寺 總禪寺 永久寺 大圓寺 養昌寺 妙清寺 慶安寺
 - 第二組 吉祥寺 高岩寺 泰宗寺 江岸寺 因洞泉寺 昌林寺 大林院 福壽院 正覺寺
 - 第三組 嘉福寺 長泉寺 嘉運寺 祥雲寺 慈照院
 - 第四組 金剛寺 高源院 永泉寺 多福院 傳明寺 林泉寺 道榮寺 日輪寺 清嚴寺
 - 第五組 宗泰院 寶泉寺 長泰寺 盛高院 長源寺 長延寺 長龍寺 萬昌院 洞雲寺
 - 第六組 龍門寺 保善寺 天德院
 - 第七組 宗參寺 寶祥寺 松雲寺 大龍寺 清久寺 長昌寺 宗清寺 鳳林寺
 - 東京府第四曹洞宗務所管内
 - 第一組 靈運院 増林寺 善德寺 長慶寺 碩運寺 中央寺 梵音寺
 - 第二組 圓德寺 法泉寺 常光寺 明源寺 慈光院 福嚴寺 榮壽院
 - 第三組 總泉寺 福壽院 潮江院 安昌寺 慶養寺 東禪寺 出山寺 梅林寺 真正寺
 - 第四組 正覺寺 正洞院 法清寺 宗慶寺 全得寺
 - 第五組 龍谷寺 祝言寺 曹源寺 東岳寺 東國寺 法福寺 白泉寺 天龍寺
 - 第六組 永見寺 萬隆寺 本然寺 大松寺 崇福寺 松應寺 玉宗寺 東陽寺 海雲寺
 - 心月院 松源寺
- 右發起寺院一同敬白
- 申込書は各寺院或は別項定期布教會場に備へ置候間隨時何れの寺院なりとも又布教場へなりとも御申込被下度候

曹洞婦人會規則

- 第一條 本會は曹洞婦人會と名く
- 第二條 本會の目的は本證妙修の宗乘を奉して安心の歸處を得婦徳を涵養して護法慈愍の淨行を勤むるにあり
- 第三條 本會は擅信徒の婦人を以て組織す、
但し僧侶及男子を保護者となす、
- 第四條 本會は毎月數回例會を開き毎年春秋二季に大會を開き碩徳を請聘して法話を請ひ信念の涵養會員の親睦を圖るものとす、
但し其會場及時日は別に之を定むるものとし場合に依り他の團體と連合して教會を開設することを得
- 第五條 本會の會員は左の如くに分つものとす、
- 一 正會員 擅信徒の婦人
 - 二 贊助員 擅信徒男子
 - 三 保護員 僧侶
- 第六條 本會は左の役員を置く
- 會頭 一名 副會頭 二名以内
 - 幹事十名以内 評議員 若干名
- 但し正副會頭及幹事は正會員の互選として評議員は會頭に於て囑托す役員の任期は滿一箇年とし再選を妨げず、
- 第七條 本會々員及び贊助員は會費として一ヶ月金五錢を納附するものとす、

第八條 本會の經費は會費を以て支辨す、但し臨時寄附金等ある時は幹事會の決議に依り經費に充つることを得、

第九條 本會は會務の發展に資する爲め僧侶を以て委員部を組織す、

第十條 本會委員部に左の職員を置き會務に參與す、
委員長一名、專務委員十名以内、常務委員二十五名以内

第十一條 委員長及常務委員は委員部に於て互選し專務委員、常務委員の互選を以て之を定む

第十二條 本會役員は常に委員部と聯絡を保ち重要な事項は協議の上施行するものとす

第十三條 本會々頭及委員長は必要に應じて内規を定め會務及委員部事務の分擔功勞の
彰表、教場の開閉、會議召集並に入會許否の決定等を爲すを得

第十四條 但し會頭委員長の意見一致せざる時は臨時大會の議に附すべきものとす
本會規則は大會に於て出席者三分の二以上の賛成を得るに非ざれば改正する
を得ず

第十五條 但し委員は正會員と同じく會議に列するものとす
本會の創立事務は委員部に於て取扱ふものとす

明治四十四年五月

曹洞婦人會

禪の講話

曹洞宗大學々長 秋野孝道

本日此の青年傳道會の開堂式に臨み諸君の爲めに一場
の講話をなすを得たるは私の光榮であります、偕て今日
の私の話の題目は禪であります、禪と申せば四禪八定あ
り二乗聲聞には聲聞の禪あり菩薩には菩薩の禪あり如
來には如來の禪あり又老子の打坐と云ひ靜坐と云ふは
矢張禪の意に近く西洋には沈思とか冥想とか云ふも亦
一種の禪である今私の謂ふ座禪は彼の布施持戒忍辱禪

定精進知惠の六度の禪にもあらず戒定惠三學の禪にもあらず六度萬行の禪と三學の禪と其他一切の禪と包含する所の禪である即ち諸佛所證の三昧如來の本心が禪である禪は一心の異名である故に各宗各派も云はゞ禪の分かれてある一大藏經も禪の註釋に過ぎぬ故に禪は本來無名なり從來行相なく天真性相を忘ず或は是れを如々と云ふ如々とは固より假名なり名くべきなく又名つく可からざるが故に假りに名けて如々と云ふのである南岳曰く説きて一物に似たるも即ち中らず説似一物即ち中と即ち之れ禪である六祖大師は本來無一物と云はれた本來無一物とは乞食の囊や貧乏人の米櫃の事ではな

はな一切萬有が本來無一物ジヤ法の本法元と無法一字七字三五字萬象究め來りて據をなさず假々は玆に本の扇子がある如何にもあるが如くであるされど如くである決して真有ではない見よ是れ其實體は紙と竹と要めと糊とにて造れるのみ之を分離せば所謂扇子なるもの何處にかある斯く云ふ秋野孝道とても亦然り物云ふは唯是れ空氣の働き體軀は地水火風の四大假りの和合に過ぎず四大分離せば釋迦も孔子もナリシヤもウシヤも今果して何處にかある之を本來無一物と云ひ法の本法元無法と云ひ萬象究め來りて據を爲さずと云ふ云々ののであ然らば宇宙間一切の現象は是果と能何

の所爲ぞや、金剛經に云ふ應無所住而生其心之即ち萬有の真相なり、竹竹にあらず糊糊にあらず紙紙にあらずして茲に扇子あり、大根を分析すれば畑の土と肥しとなりされど土土にあらず肥料肥料にあらざる時、茲に大根あり、大根人參芋菜葉米麥等は秋野孝道が五體を造る原料なり、大根大根にあらず人參人參にあらず午莠午莠にあらざる時、茲に秋野孝道あり、ユ、を以て扇子扇子にあらず世界世界にあらず之を扇子と云ひ之を世界と云ふのである、娑婆世界は假りの宿りにして一切萬有は假有に似たり而かも之れ真相にして真有なり、本來無一物なるが故に永久無盡藏なり、假へば此の扇子本來風を有せず、有せざるが故に無盡藏なるにあらずや、是を禪の本領とするのである。

今私は禪とは「作麼の價ぞ」と名けたい、禪の價何程なりやと云ふのである、無一物ならば唯である無價値である、無盡藏ならば無限の價がある、何億萬圓か知れない、價なくして價あり價ありて而かも價なし、畢意作麼の價ぞ「試みに火を御覽なさい、私は煙草を吸はぬから幾分か火のお世話にある事が少ないが煙草を用ひる方は先づ寢床の中で目を醒せばスグに一服吸はねば起きられぬ、行住坐臥、マツチを袖の中に忍はせて置く茶を煮る飯を炊く暖を取る、悉く火の厄介になるのである、必要實に一日も欠

く可からざるものである、而かも又其反面には近日の吉原の大火の如きがある、一朝にして百萬の貨財を灰燼に歸せしむ山形にも大火がありました殆んど全市を焼き盡して有形無形の損害實に量られず、十善法語の中にも一人の娘が薪に火の付けるものにて鹿を打ちしに鹿逸して稻村に入り人家に延焼し象を焼き象怒つて山に入り連山燄々として火山の如く隣國に災して怒を招き遂に十年の戦を開くと實に火ほど恐ろしきものはない其災をなすに至りては幾何なるや慮られぬ、されば火は果して善なりや悪なりや火は畢竟作麼の價ぞ次に水は如何夏の田植時には實に農家の命とする處である又都の

方も氷店などのお世話になる事が此れからは時々ありませう、其必要なる事は今更一々數へたてる必要はありませんが其害をなすに至つては矢張之も火と同様である、昨年東京の浸水、静岡縣の洪水など人畜貨財に損害を與へたる事は實に甚大である、船を浮ぶるも水なり船を覆へすも水なり、水果して善なりや悪なりや水畢竟作麼の價ぞ人間に光明を貴ぶ鴟梟の屬や鼠などは暗夜を好む、暗中は實に彼等の世界である、人間が夜中に目の見へぬ事を鼠めが知つて居るから人を馬鹿にして枕邊であらうが足許であらうが横行して居る、此處に光明を好む者あれば彼處には暗夜を樂むものあり、明暗果して何れ

か優何れか劣なりや山河大地を以て清淨法身の露現と
見る人あれば又三界を火宅の如しと觀ずるものもある、
世間往々樂天の人あり又厭世の人もある、されど世界其
者は苦にもあらず樂にもあらず苦樂相半するにもあら
ず悟れば如來常住の本地も迷へば六道輪回の穢土と見
ゆ、人世畢竟作麼の價ぞ、迷悟畢竟何の所爲ぞ、迷ひが澁柿
ならば悟は甘乾なり澁強き柿ほど甘味深し、煩惱は菩提
の影にして雜草の生ずる土地に耕して良田とすべきで
ある、生死涅槃豈に別事ならん哉、生死あればこそ涅槃あ
るのである、生死は佛の御命なりとさへ申すのである、佛
教に依りて生死の苦を逃れんとするは大なる迷である、

唯生死を明らむべきである、曾て或る僧が大隨和尚の處
へ行て劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不
壞かと尋ねた、這箇と云ふは人々の心の事である、唯這箇
即ち「コレ」と呼んで諱名を犯さぬ所が妙である、ソコデ大
隨が壞と答えた、即ち這箇が滅亡すると云ふた、僧は驚い
た、恁麼ならば他に隨ひ去るや、心ばかりは不生不滅のも
のと思ひしに、ソコナラバ大千世界と一所に焼けて仕舞
ますかへ、ソウダ其通り、他に隨て去ると大隨が答へた、サ
ア此の僧心配なること夥し、落膽限りなし、早速龍濟和尚
の所へ參つて劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇
壞か不壞かと又やつた、龍濟曰く不壞、僧喜んだ、ダガ未だ

安心が出来ぬ更に何んとしてか不壞なると、念を推して
聞き正した、龍濟曰く大千に同じきが爲めなりと、サテ又
二苦勞大千と同じければ這箇も壞する道理となる、先
に不壞と聞きしは糟喜び、サテ又這箇を如何にせんと
定めて此の僧は三日三晩泣き明かして遂に死んで仕舞
つた事であるふ、笑止々々、東坡云はずや其變ずる者より
して之を觀れば天地も曾て以て一瞬する事能はず其變
ぜざるものよりして之を觀れば物と我と皆盡きる事な
しと物皆無常變遷の理を脱する事なくして而かも其儘
常住なり、永恒不滅なり、壞にあらず不壞にあらず、壞と不
壞とを打破して始めて這箇を見るのである、と申すと這

箇と云ふは非常に六ヶ敷八釜敷品物になら、ソシテ物で
はない、チ本八公貴様ドウダ、ウシ！ヨシ！よかるう、此
れで話が終りだ、側から聞けば何んの事やら更に分から
ぬ、ダガ御當人達は極めて好く了解して居る、之れ這箇の
神通なり蓋し這箇はコ、を去る事遠からずである、香嚴
は撃竹の聲に悟り靈運は桃花の色に觀ず大雅堂は巨峴
の草に入るを見て畫法を悟り个臭は雲の開くを見て書
法を知る、之れ禪の活計這箇の神通である、滌山が曾て畫
寐をして居つた弟子の仰山が來つた瀟山目を醒して仰
山に云ふには私が今畫寐して夢を見た判断をして呉れ
と仰山立所に手水と手拭を持ち來つた、瀟山手を打つて

成程夢判斷甘く當つた、ユンドは隣室の香嚴と云ふ小僧を呼んで仰山が神通を現した話をすると香嚴もまけぬ氣になつてソレでは私も神通を現しませうと云ふ、然らばやつて見よと云はれて此の小僧早速高茶臺にお茶とお菓子を師匠の瀧山の所へ持つて來た、成程之は上出來と賞められた之が即ち神通である禪學である悟りである、此の筆法で萬事を行ふのである間の抜けた小僧はお客様があるソレお茶を持つて來いと云ふと善い方のお茶にしますか悪い方ですかとお客の前で聞くお茶菓子を持つて來いと云へば此間貰つたアノ古い方から先へ使ひませうと云ふ實にハヤお客様の前で主人に恥をか

ゝせると云ふ者です、之ではいけません、劉鐵磨と云ふエライ比丘尼が瀧山和尚の所へ參つた、スルト瀧山が老特牛汝來や老特牛とは此尼僧の事を云ふのです、劉鐵磨が曰はく來日臺山に大會齋あり和尚還て去るや麼御馳走を頂戴に出かけますかへと聞いた、スルト瀧山身を放て臥す、物云ふも面倒なりと横に臥て仕舞つた、スルト此の尼僧もソレで宜しいと便ち出て行つて仕舞つた、之れ不言にして通ずる所である、佛法は此の烟を見て火あるを、知り、牆を隔て、角を見て牛たるを知り、響を聞いて本體を悟る事が必要である、之を日常の左右に應用するのが禪であります、道元禪師の所謂三業に佛印を標し、三昧に

端坐する時遍法界ミナ佛印となり盡虚空悉く悟りとなる故に諸佛如來をしては本地の法樂を増し覺道の莊嚴を新たにすと仰せられたは此の事でありませす之を禪の大要とするので私のお話は之だけに致して置きます

右の稿は記者の聞取の儘にて未だ學長の御校閱を経ませんから
文責は記者にあります

明治四十四年七月十六日印刷
明治四十四年七月二十日發行

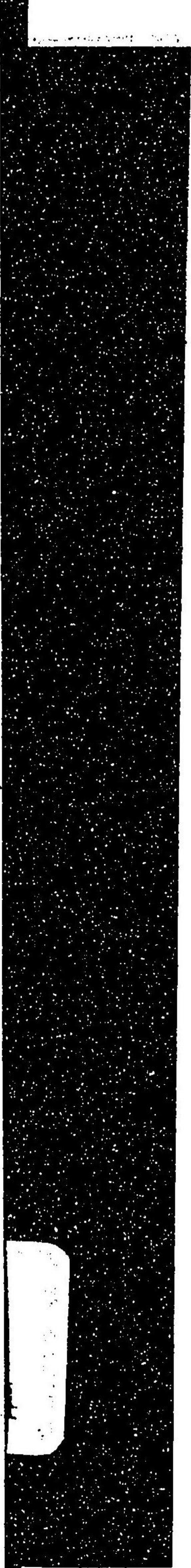
編輯者兼
發行者

愨 大象

印刷者

下谷區池之端七軒町二十三番地
森 江 英 二

東京市本郷區春木町貳丁目二十一番地



Illegible text on a white label.

~~庭の訓~~

禅の話

秋野孝道

国立国会図書館

019639-000-9

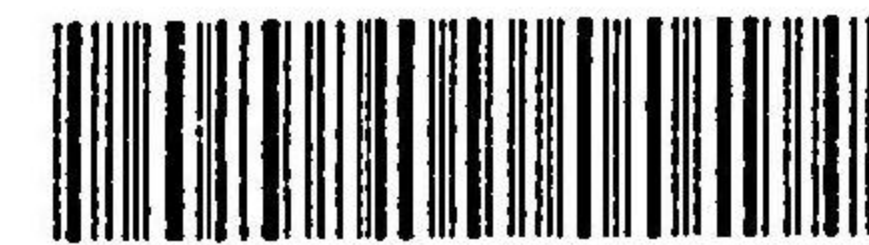
特49-194

禅の話

秋野 孝道 / 著

M44.7

ABG-0419



特

1